4011　大島における園芸作物の産地力維持・強化

対象集団　伊豆大島クチナシの会（８人）、伊豆大島千両研究会（６人）、伊豆大島あしたば生産者組合（15 人）

地域の紹介

大島は、東京の南南西約 120㎞、人口約 7,000 人、面積 91.06 ㎢の伊豆諸島最大の島である。大島の農家戸数（販売農家）は 68 戸（2020 年農林業センサス）である。農業産出額（植木、緑肥作物を除く）は 350 百万円（2020 年）で、そのうち花き類が 210 百万円を占め、ブバルディア、ハラン等の切り花や切り葉、センリョウ、クチナシ等の切り枝を関東の卸売市場を中心に出荷している。一方、野菜の産出額は 100 百万円で、町内での直売も多少はあるものの、主としてアシタバとサヤエンドウが都内卸売市場を中心に出荷されている。大島の農業の担い手は、高齢化と後継者不足により販売農家数はこの 10 年で約 20%減少した一方で、町が運営する新規就農者支援研修センターを卒業した新規就農者も近年誕生している。

選定理由・目標

１　選定理由

（1）センリョウ、クチナシの産地強化

センリョウ、クチナシは大島の切り枝生産の主要品目で、市場からの評価も高く出荷拡大が期待されているが、出荷拡大にあたりそれぞれ下記の課題がある。

・センリョウでは炭そ病等の発生や、出荷調整時の前処理剤（出荷前の水揚げ時に使用する品質保持剤）の使用法が煩雑であること。

・クチナシではカイガラムシ等の発生や、適切な前処理剤が未確立であること。

また、いずれの品目も新たな担い手の確保・育成が求められている。

（2）アシタバ栽培の後継者確保と育成

アシタバは、比較的値段が安定しており、ほぼ通年出荷が可能な品目である。アシタバの主要な生産者は高齢化しており、今後産地を維持するためには担い手の確保が求められている。一方で、近年は島外からの新規就農者がアシタバ栽培を始めており、こういった生産者の経営の安定、地域への定着、更に市場への安定出荷のための支援が必要である。

２　目　標

（1）センリョウ、クチナシの産地強化

①　センリョウ

ア　栽培技術・品質向上　　年間出荷本数　８万本、出荷規格の統一

イ　新規出荷者の育成　　新規出荷者の年間収穫本数　４千本

②　クチナシ

栽培技術・品質向上　　年間出荷本数　４万本、品質管理技術の改善

③　センリョウ及びクチナシ

ア　栽培技術・品質向上　　品質改善（前処理剤導入）に積極的な生産者　３戸

イ　栽培者の掘り起こし　　栽培事例集作成、新規栽培者　２戸

（２）アシタバ栽培の後継者確保と育成

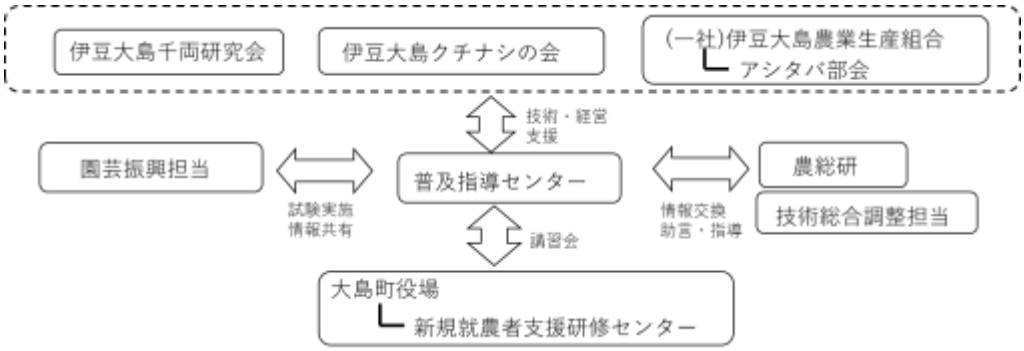
①新規栽培者の市場出荷支援

ア　新規市場出荷農家　１戸　イ　新規就農者（２戸）の生産量　3,200 kg

②新規栽培者の確保

ア　栽培事例集作成　イ　新規栽培者　１戸

活動の体制



活動の概要

１　センリョウ、クチナシの産地強化

（１）栽培技術・品質向上

センリョウの炭そ病罹病葉

・病害虫（センリョウでは炭そ病等、クチナシではカイガラムシ等）の発生消長を調査するとともに、適期防除指導、病害虫防除に関する検討会３回及び講習会１回開催した。

・島外出荷のセンリョウは、個選個販のため出荷規格が生産者毎に異なる。市場から大島産センリョウは揃いが良いと評価を得られるように、伊豆大島千両研究会として今後の規格統一を目指している。そこで、各生産者に対し出荷規格の聞き取り調査を実施した。この結果を受け、規格統一に向けた検討会を１回開催した。

・センリョウは、国内各地で 12 月頃に開催される千両市に合わせて一斉出荷となるため、収穫期は非常に繁忙となる。品質を保持しつつ労働力を平準化するためには、前処理剤の使用による品質保持期間の延長が必要である。現在、主要な生産者のうち 1 戸が前処理剤を使用しているが、他の生産者は処理方法が煩雑であるため使用していない。品質保持技術を普及させるため、普及指導センターでは他県や資材メーカーから情報収集を行うとともに、試験研究部門と協力して、慣行よりも簡易で同等以上の効果が得られる技術の検討を進めている。

・クチナシは日持ちが悪く、花弁のしおれや黄化等が問題となるため、試験研究部門と

連携して適切な前処理剤の選定を行った。また、切り前（収穫時の花の咲き具合や状態）の判断が難しいとされるため、技術が高い生産者の収穫時の見極めを調査した。

（2）センリョウの新規出荷者の育成

・大島はアルカリ土壌が多いため、土壌診断を実施し、栽培予定地の土壌をセンリョウの好適ｐＨに改善するよう指導した。

・新規に市場出荷する生産者に対し、把握した栽培事例をもとに年間の作業やそのポイント等の栽培技術、島内で統一した出荷規格を用いて出荷調整の斉一化を指導した。

（3）センリョウ、クチナシ栽培者の掘り起こし

・大島町が運営する新規就農者支援研修センター研修生全員に対し講座を開催し、普及指導センターが作成したセンリョウ栽培の技術資料を用いて実習を行った。

・クチナシの栽培技術が高い生産者に講師を依頼し、圃場において剪定方法や切り前等の実習を含めた講習会を２回開催した。

・今後の担い手育成の資料とするため、センリョウ２戸、クチナシ１戸の主要出荷者の栽培事例を調査した。

２　アシタバ栽培の後継者確保と育成

（1）新規栽培者の市場出荷支援

・市場出荷経験のない新規栽培者に対して、アシタバの栽培技術が高い生産者を講師とした講習会を１回開催した。

・市場出荷を開始した新規栽培者に対して、出荷状況や問題点について聞き取りを行った。

出荷調整の指導を受ける新規就農者

（2）新規栽培者の確保

・就農を希望している者、既に農業をはじめていてアシタバの栽培技術を習得したい者を対象にした就農セミナーを開催し、播種について講習を行った。

・栽培事例集の作成に向け、主要出荷者の調査を行った。

成　果

１　センリョウ、クチナシの産地強化

（1）栽培技術・品質向上

・センリョウの炭そ病とクチナシのカイガラムシ類について発生消長を確認し、右図の結果を得た。防除の実施状況を調査したところ、センリョウは罹病残渣の持ち出し処分の徹底や定期的な薬剤散布により、被害を低く抑えることができていた。一方クチナシでは、高齢化により防除作業が難しくなった圃場で品質低下が著しかった。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
センリョウ								炭そ病				
クチナシ									カイガラムシ			

・センリョウの品質を揃えるため、島内や他県の規格等を参考として、普及指導センターから新しい出荷規格を提案した。農業者と検討を重ねた結果、2022 年に「大島の統一的な出荷規格」を策定した。

・前処理剤について、現在１戸で現地実証を行っており、その成果を見た他の生産者も導入を検討している。

・クチナシは、島内で技術力の高い生産者２戸について、切り前の方法を調査した。

・2022 年の出荷本数は、センリョウが計画策定時６万本であったのが６万５千本、クチナシが２万本から３万３千本となった。

（２）センリョウの新規出荷者の育成

・土壌改良資材の継続的な投入により、徐々に好適ｐＨに改善されてきている。

・2022 年には、当初の目標である４千本を上回る５千本を初出荷した。

（３）センリョウ、クチナシ栽培者の掘り起こし

・新規栽培者はまだ誕生していないものの、新規就農者の中にはクチナシに興味を持つ者がおり、挿し木や栽培に向けた技術指導を行った。

・伊豆大島千両研究会会長及び前会長、伊豆大島クチナシの会会長の栽培事例をそれぞれ把握した。

２　アシタバ栽培の後継者確保と育成

（１）新規栽培者の市場出荷支援

・普及指導センターは収穫及び出荷調整の講習を開催し、技術の早期習得を支援した。

・2021 年には新規栽培者２戸が市場出荷を行った。

・対象生産者２戸は 2022 年に 900 kg生産した。この年は契約出荷が増加したため、市場出荷はできなかった。この２戸は2024 年に栽培面積が増加する見込みであるため、市場出荷に向けて再び検討している。

（２）新規栽培者の確保

・普及指導センターは、アシタバの栽培に興味を持つ者に対して講座を実施し、新規栽培者の掘り起こしを行った。

・今後の担い手指導の資料とするため、アシタバ部会副会長などの市場の主要出荷者３経営体の栽培事例を把握した。

・主要出荷者の高齢化が進む一方で、アシタバ部会に新たな会員が３戸加入し、そのうちの１戸が栽培をはじめている。

残された課題

１　センリョウ、クチナシの産地強化

・病害虫の発生状況に合わせた防除指導を継続する。

・作業がより簡易で効果が高い前処理剤について、試験研究部門と協力して検討及び現地実証を進めていく。

・センリョウでは、栽培面積の拡大を検討している農業者に対し、品質の維持・生産量の拡大に向けた指導を継続する。

・センリョウ、クチナシの栽培に興味を持つ農業者に対して、栽培指導や講習会等、指導を継続し、担い手を確保・育成していく。

２　アシタバ栽培の後継者確保と育成

・新規栽培者の栽培技術の向上を図ると共に、今後の作付増加に向け、他品目との兼ね合いを考慮した栽培計画作り等の指導を継続する。

・担い手の確保・育成を図るため、これまでに把握した栽培事例をとりまとめて活用する。